コミック漫画「フラジャイル」

毎週水曜日夜10時からフジテレビ系列で放映されている、病理医を主役としたドラマ「フラジャイル」をご覧になっているだろうか。小説・脚本を読むのが苦手な方々には、読みやすいコミックマンガが刊行されている。ちなみに“フラジャイル(Fragile)”とは、Tough(丈夫、強靭な)の反語で「壊れやすい、虚弱な」という意味らしい。

ドラマ「フラジャイル」は、医療現場での医師達に対する不信から、『俺の診断率は100%、絶対だ！！』などとうそぶく孤高の病理医に共鳴し、果敢にも神経内科医を投げ打って病理医を志す女性医師(ザッキーこと宮崎先生)の活躍を巡る医療物語である。

これまで、救命救急医(ER・ドクターヘリ)、心臓外科医、移植医、産科医、法医学者、僻地医療を扱った医療ドラマを散々鑑賞してきたが、日頃なじみの薄い病理医を主役にした今回のこのドラマに強く心惹かれた。というのは、小生学生時代に病理解剖記録テープの書き起こしのアルバイトをしていたことがあるからである(約300例)。その後4年間を病理学専攻の院生として在籍していたが、学園紛争の煽りと元来の勉強嫌いもあって、中途退学となった。

当時の病理学教室は主に、病理解剖・院内外病理組織診断・実験病理とは名ばかりの製薬会社下請実験に追われる毎日で、ドラマに見られるような生き生きとした診療に携わるストーリー(これを臨床病理という)とは程遠いものだった。

然る臨床教授から、『病理は腐ったリンゴを診ている』と揶揄され、言葉を失ったことを思い出す。かつて、この手のドラマの主人公のような臨床病理医を夢見て渡航を企てたこともあったのだが・・・・・・。

ところで、旧王子病院内に病理解剖と電子顕微鏡(電顕)を備えるための部屋があったことをご存知であろうか。当時、ゴルフの傍ら産業医科大病理学教室の訪問研究員として在籍、透析患者さんの皮膚組織の研究をしていた。透視室で腎生検を行い、光検・蛍光抗体染色・電顕所見の3点セットで腎生検の組織診断を行っていた(森松稔教授、阿部哲哉先生と小生を加えて)。しかしながら一度も病理解剖は行われず、電顕を備えることもなかった。

『三つ子の魂百まで』の諺があるが、ドラマ「フラジャイル」のプロット(筋立て)は、壊れやすいひとりの若き学徒がおぼろげに描いていた青春小説のシナリオそのままであった。その頃の病理学教室の現場を知らなかったはずの妻は、ことのほかドラマ「フラジャイル」がお気に入りである。恐らく当時の苦しかった生活を懐かしんでのことだろうと推察する。

何だか半世紀前の小生の「語り」になってしまったようで申し訳ないが、理屈抜きに面白い、心の通ったドラマである。

平成28年2月9日

はまゆう会会長　市丸　喜一郎

(校正：椎葉)

アフタヌーンKC『フラジャイル』1～5巻　原作：草水敏　漫画：恵三朗

(はまゆう倶楽部)